

土地改良事業実施地区内
埋蔵文化財発掘調査概報

西大室遺跡群 II



(上欄引遺跡全景)

昭和55年度

前橋市教育委員会

序

近年、農業の近代化がすすむにつれ、農地の効率的利用を目的とした土地改良事業がさかんであります。これら事業と埋蔵文化財保存の問題は常にうらはらの関係にあり、本市教育委員会であっても、文化財保護という立場から両者の調整に努力しているところであります。

ここに報告する西大室遺跡群Ⅱもその一つで、道路部分及びやむを得ず削平する部分について記録保存のための発掘調査を実施いたしました。調査の結果、縄文時代～平安時代の各時期にわたる竪穴住居跡・弥生時代～古墳時代の墳墓群（周溝墓と古墳）・中近世の墓等この地域の歴史を解明する上で貴重な資料が数多く発見されました。ここにその成果の一端を報告いたします。

今回の調査を実施するにあたり、終始御協力いただいた農政部土地改良課・西大室土地改良区の方々、また直接調査に携わっていただいた作業員の方々に対して厚くお礼申し上げます。

昭和 56 年 3 月 31 日

前 橋 市 教 育 委 員 会

教 育 長 金 井 博 之

例 言

1. 本書は、前橋市西大室土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査のうち、昭和55年度事業である北山遺跡と上縄引遺跡の発掘調査概報である。

2. 遺跡の所在地は次の通りである。

前橋市西大室町字北山1,930 他

前橋市西大室町字上縄引2,212 他

3. 発掘調査は作物等の関係で、昭和55年5月17日～7月10日と10月6日～12月20日の二回に分けて行ない、次の者が当たった。

発掘担当者 松本 浩一（文化財保護係長）

福田 紀雄（文化財保護係主任）

飯塚 誠（ ” 主事）

入内島裕美（ ” ）

井野 誠一（ ” ）

近藤 昭一（ ” 嘱託）

発掘 西大室地区を中心とした地元作業員

整理 社会教育課文化財保護係分室整理作業員

4. 本書の執筆分担は次の通りであり飯塚が編集を行なった。

執筆 II-3-(2)～(4) 松本 浩一

II-3-(5) 須田まさえ

II-4 飯塚 誠・杉浦つや子（文化財保護係主事）・近藤 昭一

（付記） 近藤 昭一

残りの部分 飯塚 誠

整理実測 飯塚 誠・近藤 昭一・柴崎まさ子（整理作業員）

製 図 飯塚 誠

写 真 飯塚 誠・松井 國光

5. 本調査における出土遺物は一括して前橋市教育委員会で保管している。

整理作業員 安藤友美・石田直行・柏瀬順一・金井典子・榊沢真弓・柴崎まさ子・須田まさえ
・須藤恵子・中島聡子・松井英治・松井國光・布施恵子・若林淳子

目 次

序	
例 言	
目 次	1
I. 発掘調査の経過	2
II. 発掘調査の概要	3
1. 縄文式土器を伴う遺構	4
2. 弥生式土器を伴う遺構 — 周溝墓 —	6
3. 古墳と埴輪を伴う遺構	8
4. 土師器・須恵器を伴う遺構 — 竪穴住居跡 —	17
5. その他の遺構	19
(1) 掘立柱建物跡	19
(2) 地下式土壇	19
(3) 墓 塚	20
III. 結 語	22
(付 記) 西大室地区の石造文化財	24

挿 図 目 次

挿図 1	遺跡周辺地形図	2
" 2	発掘調査地点	4
" 3	縄文式土器拓影並びに実測図	5
" 4	上縄引地内出土土器	5
" 5	周溝墓出土遺物	7
" 6	周溝墓出土遺物	8
" 7	上縄引 1 号墳石室実測図	10
" 8	上縄引 3 号墳石室実測図	11
" 9	上縄引 7 号墳石室実測図	12
" 10	上縄引 9 号墳石室実測図	14
" 11	石室内出土遺物実測図	15
" 12	遺物実測図並びに拓影	16
" 13	(参考資料) 今井神社古墳の埴輪	23
" 14	上縄引 1 号住居平面図並びに遺物実測図	18
" 15	1・2 号墳実測図	19
" 16	墓塚内出土遺物	21

1 発掘調査の経過



挿図1 遠跡周辺地形図 (1: 25,000)

(挿図1の説明)

- 1 荒砥147号墳
- 2 前二子古墳
- 3 中二子古墳
- 4 後二子古墳
- 5 上川久保遺跡
- 6 大室小学校庭遺跡
- 7 大室小学校農場遺跡
- 8 大室石原遺跡
- 9 大室城址
- 10 天神山古墳群
- 11 丸山古墳群
- 12 阿久山古墳群
- 13 伊勢山古墳
- 14 産泰神社
- 15 大稲荷古墳群
- 16 製鉄遺跡
- 17 横俣古墳群
- 18 セツ石古墳
- 19 巨石祭祀遺跡
- 20 弥生遺跡
- 21 下青竜古墳群
- 22 多田山火葬墓群
- 23 赤堀茶臼山古墳
- 24 五料山古墳
- 25 轟山古墳群
- 26 大室元城跡
- 27 飯土井遺跡
- 28 荒砥上敷訪遺跡
- 29 荒砥五反田遺跡
- 30 荒子の砦
- 31 第I次調査地

今回の発掘調査は、前橋市西大室土地改良事業実施地区内における遺跡の事前・記録保存調査の第2・3次調査である。調査対象地は、土地改良事業実施予定地の内、事前の遺物マッピング調査によって遺跡と推定された地域である。所在地は、前橋市西大室町字北山と字上縄引の2地区であり、工事施行計画に則り、第2次(字北山地内)・第3次(字上縄引地内)調査として、昭和55年5月17日～7月10日、10月6日～12月20日までの100余日間を費して行った。

昭和10年の群馬県下一斉古墳調査によると、荒砥村に365基の古墳が残っていたが、本地域における埋蔵文化財の調査は、前二子古墳の記録・大室小学校校庭遺跡・五料山遺跡・荒砥上敷訪遺跡・荒砥五反田遺跡等の調査が為されたのみで、当地の様相は最近になってようやく解明されてきつつある。今回の調査地はいずれも畑地であり、古墳時代～平安時代の包蔵地として知られていた。調査は、耕作土等をユンボで遺構確認面まで除去し全面発掘の形をとって進められ、記録保存を行った。

II 発掘調査の概要

約100日間に及ぶ発掘調査の結果、約3.3haを発掘し、72遺構を検出し調査・記録化することができた。検出された遺構は、縄文時代の住居跡を始めとして、周溝墓・古墳・奈良～平安期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・中～近世の墓壇等で、当地における連続たる生活の痕を伝える貴重な資料であった。第2・3次調査において調査した遺構は以下のとおりである。(付図1, 2参照)

遺構・遺物の数量

イ、遺構数

- 縄文時代 竪穴住居跡 4 ビット 1
- 弥生時代 周溝墓 12
- 古墳時代 古墳 9 埴輪棺 2
- 奈良・平安時代 竪穴住居跡 13 掘立柱建物跡 3 ビット 1
- 中世 地下式土壇 2 井戸 1 溝跡 2
- 近世 墓 16 溝跡 6

ロ、遺物量

縄文時代前期の土器・石器、弥生時代晩期の土器・埴輪(円筒・朝顔)、奈良～平安時代

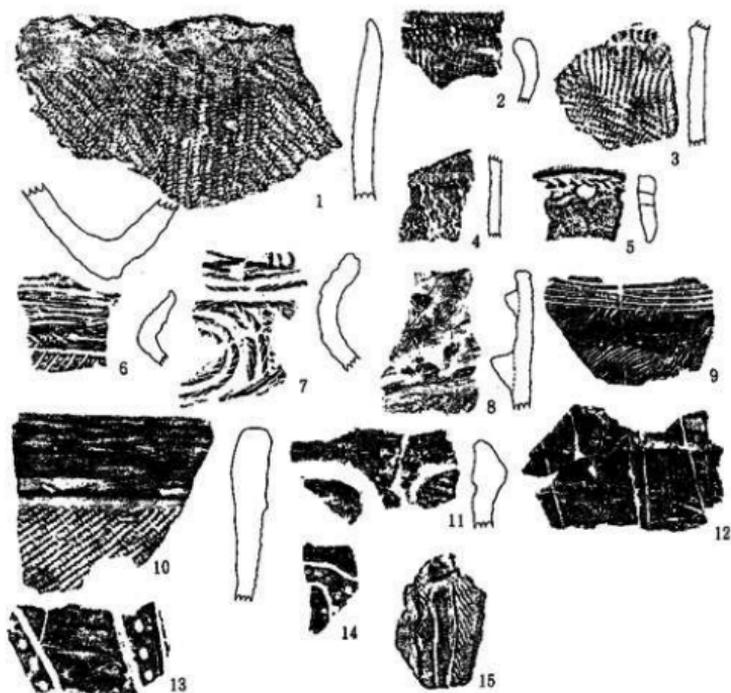


標図2 発掘調査地点

の土器等を主体として、プラスチック製コンテナバット60箱分相当。

1. 縄文式土器を伴う遺構 (図版4-1~5)

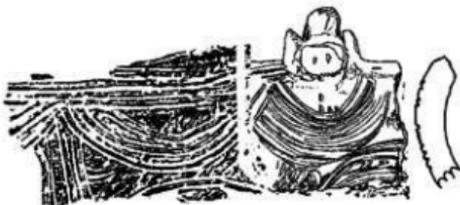
字北山地区における縄文時代の遺構は、竪穴住居跡3軒、ピット1の計4である。1号住居跡は、東壁部分が確認できなかったが、床面の広がりから、3m (南北) × 2.3m (東西) の方形プランを呈する。床面は全体的に平坦で堅緻であり、住居跡のほぼ中央に石囲いの炉跡と埋甕が認められた。残存壁高が10cmというまでの削平化のために遺物は滑石製の玉 (図版4-5) の他にはほとんど検出し得なかった。2・3号住居跡は、1号住居跡の南西側約6m付近に位置する。削平化と基壇のために破壊が著しく、出土遺物の様相から見ると明らかに重複していると思われるが、地層面での確認は為し得なかった。2号住居跡は関山期に、3号住居跡は燃糸文土器片が出土しているの



押図3 縄文式土器拓影並びに実測図（上縄引遺跡）

で早期に属すると考えられる。ピットについては、覆土の様相から縄文期に比定したものであり、遺物の出土はなく詳細は不明である。径160cm、深さ93cmの、不正円形を呈する。

字上縄引地区においては、早期後半～後期（安行Ⅱ式）の土器片が広く散布していたが、その後の造基活動によりほとんど破壊されてしまっており、竪穴住居跡1軒と炉跡と思われる集石2基を検出したに留まる。方300cmのほぼ正方形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立上り、比高は8～10cmを計る。床面は全面にわたって堅緻であり、住居の東南部分に焼土が認められた。覆土上部は擾乱を受けているために遺物相ははっきりとしないが、諸磯b式に属する土器片が多く出土している。他には、住居のほぼ中央から石皿（図版4-3）が出土している。



押図4 上縄引地内出土土器（S=1/4）

2. 弥生式土器を伴う遺構 — 周溝墓 —

弥生式土器の破片は北山地区においても採集されたが、その際には明確な遺構は検出し得なかった。第3次調査では、浅間山降下のC軽石層によって溝を埋められたもの、C軽石層を基盤層として構築されたもの等、合わせて12基の周溝墓を調査した。各遺構の概要は下記の通りであるが、本周溝墓群は、立地・溝の覆土の状態・ブリッジの位置等を手懸りとして、遺跡全体として検討すると、5グループに分けられ、東側のものから西側のものへと順次構築されていったものと考えられる。

表1 周溝墓一覧表

No.	規 模		ブリッジ		説 明
	径(m)	幅(m)	方 向	幅 (m)	
1号	11.6	1.5	N80°E	1.5	周溝の底から12cmの間層を持ち、C軽石の純層が10cm程堆積している。ブリッジの北側及び西側の溝中より遺物が出土した。(挿図5-1~6)
2号	13.2	2.2~3	S32°W	2	C軽石を含む黒色土が直接に溝を覆っている。ブリッジのほぼ正反対の溝中より遺物が出土した。(挿図5-7~12)
3号	9.4	1.5~1.8	S58°W N76°E	1.4 (西) 1 (東)	ブリッジが2箇所ある。C軽石を含む黒色土と溝底との間に、ローム粒を主体とした約9cmの間層がある。東側のブリッジのほぼ中央より遺物が出土した。(挿図5-13)
4号	8.4	1.2~1.5	N80°E	1.6	周溝の底から16cmの間層を持ち、C軽石の純層が12cm程堆積している。ブリッジの北側の溝中より遺物が出土した。(挿図5-14)
5号	19.8	2~3	S53°E	2	溝底からはほとんど離れずにC軽石の純層が6cm程堆積している。ブリッジの両側の溝中から遺物が出土した。(挿図5-15~18)
6号	9.8	1.8~2	N80°E	2	周溝の底から10~20cmの間層を持ち、C軽石を含む黒色土が溝を覆っている。(挿図6-1, 2)
7号	14	2~2.5	S59°E	3	周溝の底から6~20cmの間層を持ち、C軽石の純層が15cm程堆積している。
8号	13×13	2.5	SE方向	?	土取りの為に東側は破壊されていた。周溝の底から9cmの間層を持ち、C軽石の純層が7cm程堆積している。
9号	12.5×14	2~3	無し		ブリッジを持たない。周溝の底から10cmの間層を持ち、C軽石の純層が12cm程堆積している。北東側の溝中より遺物が出土した。(挿図6-3, 4)
10号	8×9	2	S38°E	1	周溝の底から12cmの間層を持ち、C軽石の純層が13cm程堆積している。
11号	16.6	2~2.5	S6°W	3	C軽石降下以後の築造。ブリッジの両側の溝中より遺物が出土した。(挿図6-5~13)
12号	16.6	3.5~3.8			土取りの為に南西側は破壊されていた。C軽石降下以後の築造。(挿図6-14, 15)

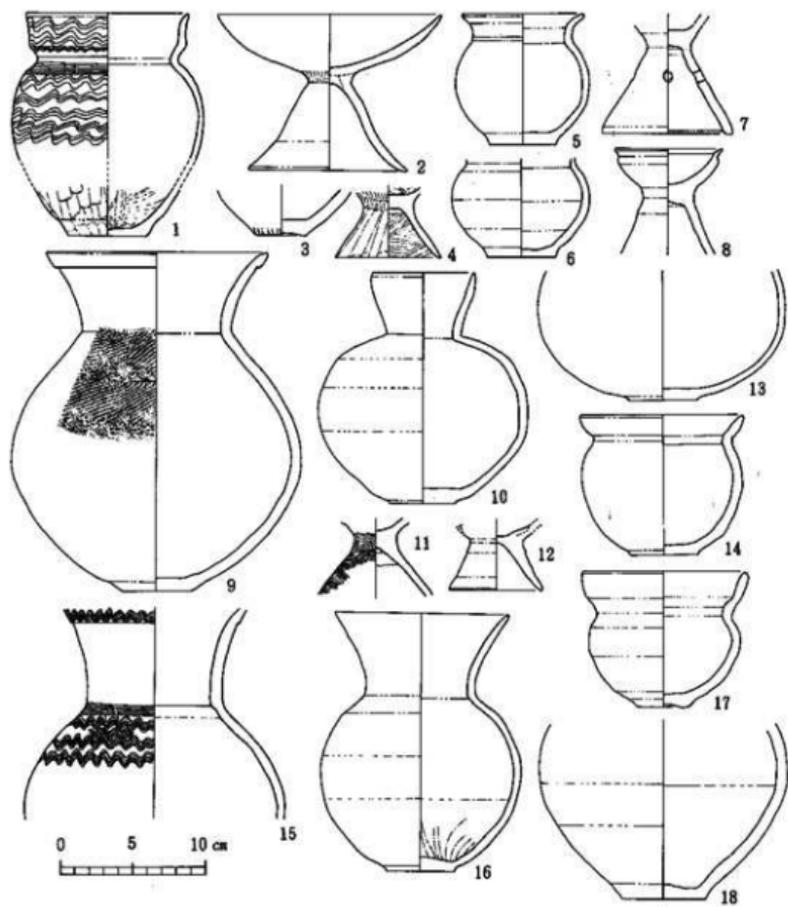
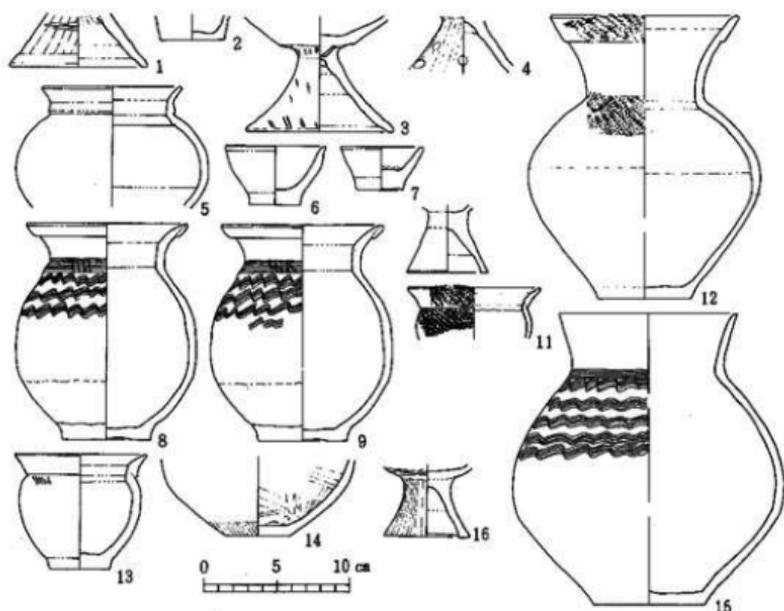


插图5 周溝墓出土遺物

(1号: 1~6, 2号: 7~12, 3号: 13, 4号: 14, 5号: 15~18)



神図6 周溝墓出土遺物(6号:1, 2, 9号:3, 4, 11号:5~13, 12号:14, 15)

3. 古墳と埴輪を伴う遺構

今回の調査で、字上繩引地区において、南への緩斜面に営まれた9基の円墳（「上毛古墳総覧」では、当該地区に3基の円墳を確認）と埴輪円筒棺2基を調査した。各遺構の概要は下記の通りであるが、埋葬主体部の遺存した上繩引1・3・7・9号墳（字名に従って命名）及び埴輪については、以下、図面を添えて補足する。

	規 模		
	径(m)	周廻幅 (m)	
1号	19.4		墳丘の南東寄りにローム層を掘り込んで作られた横穴式両袖型石室の残骸を留める。墳丘はF・Aを含む黒色土層を削り出し、その上に若干の盛り土を認めた。玄室内より鉄鏃（神図11-1）が、炭道の覆土中より須恵器蓋・坏が出土。周廻は北と西で切れる。
2号	12.6	1.5	ローム面まで削平されてしまっており詳細不明。埴輪・葺石は伴わないと思われる。
3号	19.2		墳丘のはほぼ中央にローム層を掘り込んで作られた横穴式両袖型石室を有する。墳丘はF・Aを含む黒色土層を削り出し、その上に若干の盛り土を認めた。南東寄りの周廻は確認できなかった。玄室内より刀子（神図11-3）・釘6本が出土。埴輪・葺石は伴わない。

	規 模		
	径(m)	周幅幅 (m)	
4号	18.6	2.5	ルーム面まで削平されてしまっており詳細不明。周堀覆土中より土師器環(挿図12-15)、転落した状態の埴輪(円筒・朝顔型)が出土。
5号	22.2	3~4	ルーム面まで削平されてしまっており詳細不明。埴輪・葺石は伴わないと思われる。
6号	13.6	2~2.3	1号墳の西隣に位置し、1号墳に先行すると思われるが、ルーム面まで削平されてしまっており詳細不明。
7号	14.8		墳丘のほぼ中央にルーム層を掘り込んで作った竪穴式石室を有する。石室は塗彩の痕跡を留め、鉄鍔2本(挿図11-2, 4)が副葬されていた。葺石・埴輪は伴わない。
8号			ルーム面まで削平されてしまっており詳細不明。調査区の関係で掘進しか掘れなかったが、周堀覆土中より転落した状態の埴輪(円筒)が出土。
9号			墳丘の西東寄りにルーム層を掘り込んで作られた横穴式両袖型石室を有する。ルーム面近くまで削平されてしまっており、墳丘の詳細は不明。葺石・埴輪は伴わないと思われる。
埴輪 柙 I	7号墳の周堀外縁部に作られていたが切合い関係・盛り土等は確認できなかった。70×10×120 cmの長方形の掘り方(長辺の走向N82°E)内に5本の円筒埴輪を使用して作られていた。		
埴輪 柙 II	70×120 cmの長方形の掘り方(長辺の走向N97°E)内に、10本の円筒埴輪と粘土とを使用して二重に包み込むようにして丁寧に作られていた。盛り土は確認できなかった。		

(1) 上縄引1号墳

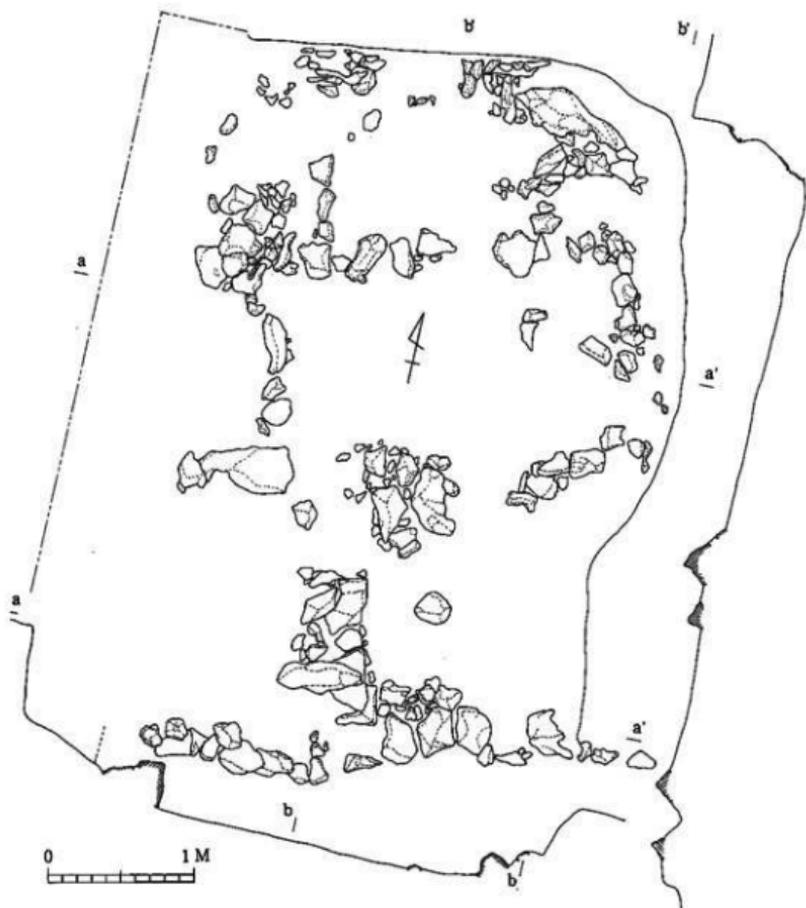
『上毛古墳総覧』に荒砥村59号墳として記載された円墳であり、規模等は明らかでないが埴輪を伴い、直刀が出土したとある。また、昭和8年に発掘されたたとあるが、記録は採し得なかった。

桑畑の中に石室裏込めの河原石が露出しており、墳丘盛土の大半は既に削平されており、主体部である横穴式石室についても発掘の有ったことを裏付けられるかの如く根石の一部を留めるのみであった。周堀は北側で確認されたが、他は削平・攪乱等のために検出し得なかった。また、埴輪については確認し得なかったが、入口部攪乱土層中より須恵器環・蓋が出土した。(規模等については、表2参照)

主体部の「掘り方」 「掘り方」は古墳構築時の地表面と思われるF・A混じりの黒色土層から掘り込まれており、石室奥壁部で約2.8m、南北長約5.0m、深さ約0.95mを計る。石室の残存状態と比べてみると、石室を構築するに要する最少限の規模であり、裏込めはさほど為されなかったと思われる。工法的に、3・9号墳と共通するものである。

主体部 硬質安山岩の割れ石を使用して構築した横穴式両袖型石室である。前述の通り羨道右壁の一部と玄室部の根石の一部しか残っていないが、石室全長4.75m、玄室奥幅2.1m、玄室長3.3m、羨道幅0.9mが計れる。玄室床面には扁平な割れ石が敷かれていた痕跡が認められ、この石の間から鉄鍔(挿図11-1、図版4-6)が出土している。

石室の前にはレンズ状の凹地があるが、攪乱が著しく、古墳と関わりのあるものか否かは明らかでない。構築の時期は7世紀の中頃と考えられる。

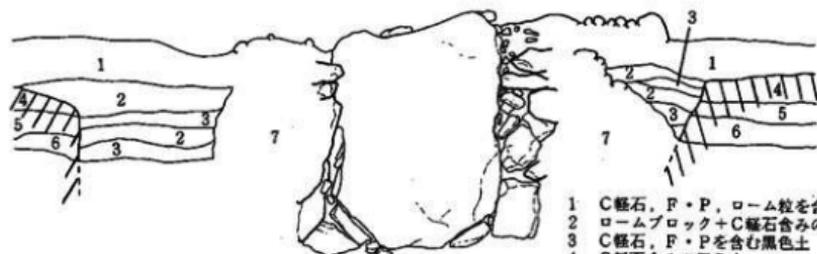


神図7 上縄引1号墳石室平面図

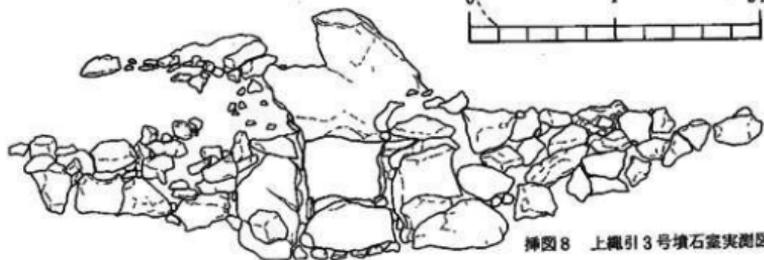
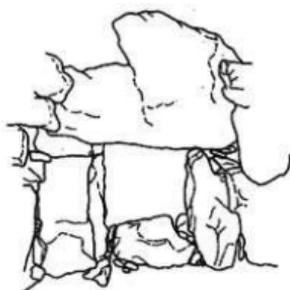
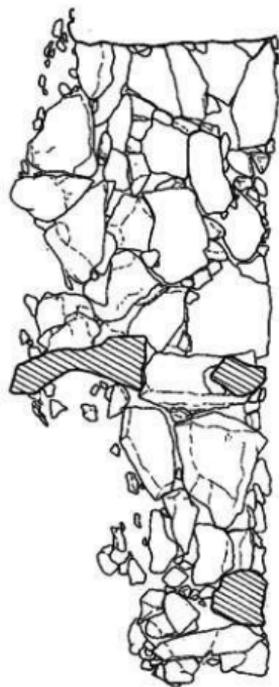
(2) 上縄引3号墳

上縄引9号墳の東に近接してある円墳（規模等については、表2参照）。墳丘盛土の大半はすでに削平されていたにも関わらず、主体部である横穴式石室はほぼ原状のまま保存されていた。これは石室の大半を、両面する傾斜地を掘り回めた「掘り方」の中に納めるといっような半地下式とも言ふべき石室の構築法に起因するところが大きい。なお墳丘下半部は地山を削って整形している。

主体部の「掘り方」 「掘り方」は古墳構築時の地表面である黒色土層から掘り込み、東西上幅が石室中央部で約4.70m、石室入口部で約5.10m、南北長約1.20m、深さ約1.20m中央部であり、石室幅に比較して「掘り方」の幅が広いという特色をもつ。



- 1 C軽石, F・P, ローム粒を含む褐色土
- 2 ロームブロック+C軽石含みの黒色土
- 3 C軽石, F・Pを含む黒色土
- 4 C軽石含みの黒色土
- 5 ローム層
- 6 ローム層
- 7 表込め石



挿図8 上欄引3号墳石室突開図

主体部 割れ石を使用して構築した両袖型の横穴式石室である。石室の左右壁、奥壁ともに良くその原形をとどめており、玄室の高さは奥壁で1.60m、左壁で1.75mを計る。前述の「掘り方」の深さが1.20m前後であり、石室の3分の2近くは「掘り方」の中に納まり、半ば地下に構築された石室である。石室の壁面から「掘り方」法面までは奥壁後で約1m、左壁で約1.8m、右壁で約1.2mあり、奥壁石の裏は「掘り方」内いばいに裏込め用の小礫を入れているが、左右壁では壁面から70cm前後のところまで石をつめ、その外側の隙間にはロームと黒色土を交互に積んで「掘り方」内を埋めていた。石室の平面形は玄室では左右壁ともに胴張りの傾向を示すが、右壁にその傾向が強い。玄室入口部には左右ともに柱状の石をたてた玄門が設置され、床には羨道入口部とともに礎石が置かれていた。石室床面には一面に小礫が敷きつめられていたが、この面で石室の規模を計測すると、石室全長4.10m（左）玄室奥幅1.43m、同中央幅1.57m、同前幅1.36m、同長2.17m（左）羨道奥幅0.57m、同前幅0.67mである。

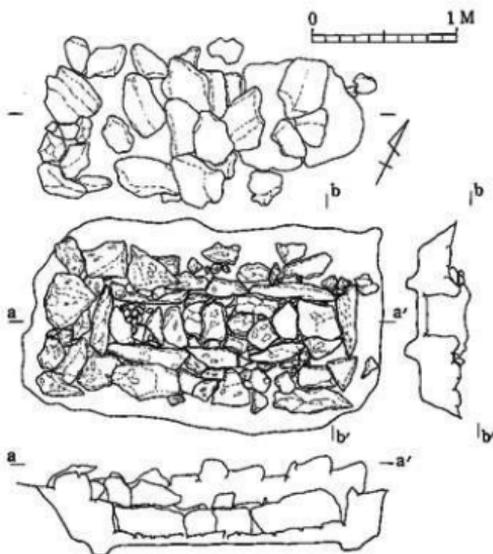
石室の前には前方がやや広がる台形の前庭がある。この部分は石室構築のために掘り凹めた「掘り方」底面よりさらに深く掘り下げ、最も深いところは石室床面より約1.4m下る。掘った法面には石組はなく、素掘りのままである。その規模は奥上幅8.3m、前上幅9.5m、長8.5mである。

蓋石は墳丘全面にはなく、石室入口部の左右前面に、前述の「掘り方」で掘り凹めた範囲内幅約5.2mの部分に見られるだけである。埴輪は無い。前庭からの出土遺物はなく、石室内もすでに空掘されほとんど残っていない。構築の時期は7世紀後半の頃と考えられる。

(3) 上縄引7号墳

墳丘盛土の部分はほとんど削平されていたが、周堀及び墳丘中央の地下につくられた壜穴式の箱式棺状石室が確認されたものである（表2参照）。

主体部である壜穴式の箱式棺状石室は、墳丘中央よりやや東寄りのところに東西方向に掘られた「掘り方」の中につくられていた。「掘り方」は、構築時の地表である黒色土層から掘り込んだもので、東西長上端2.65m、下端2.45m、南北端1.38m（下端最大幅）、深さ0.9mほどである。石室は四壁ともに板状の石を使用し、石の最大面を壁面に出すよう横に立てて築いている。なお壁石は、「掘り方」底部を幅10～20cm、深さ5cmほどに溝状に掘り凹めた中に差し込んで立てている。壁石は南北長壁が各4石、東西短壁は各1石



挿図9 上縄引7号墳石室実測図

で構成され、南北長壁の石と石の間には小礫を裏から差し込んでいるが、特に裏込めはなく、壁石と「掘り方」法面の間隙（20～40cm）には土を入れて埋めていた。石室床面にも板状の石を一面に敷きつめていたとともに、壁面には赤色顔料が塗られていた。石室上端には5枚の石を並べて（西から順次置いたもの）蓋としており、この蓋石の上面とはほぼ同じレベルで、「掘り方」内部全面に大小の礫を敷き並べ、これら礫の上に厚さ10～20cmほどに粘土を貼って石室全体を被覆していた。なお、「掘り方」上端は、この面よりさらに約35cmほど上になるが、この部分には土を入れて完全に埋めていた。石室の規模は東西長が北辺で1.53m、南辺で1.62m、南北幅が東辺で24cm、西辺で26cm、深さは東側で24cm、西側で19cmである。時期を確定する遺物等はないが、県内の他の例からみて6世紀前半の頃に位置づけられようか。

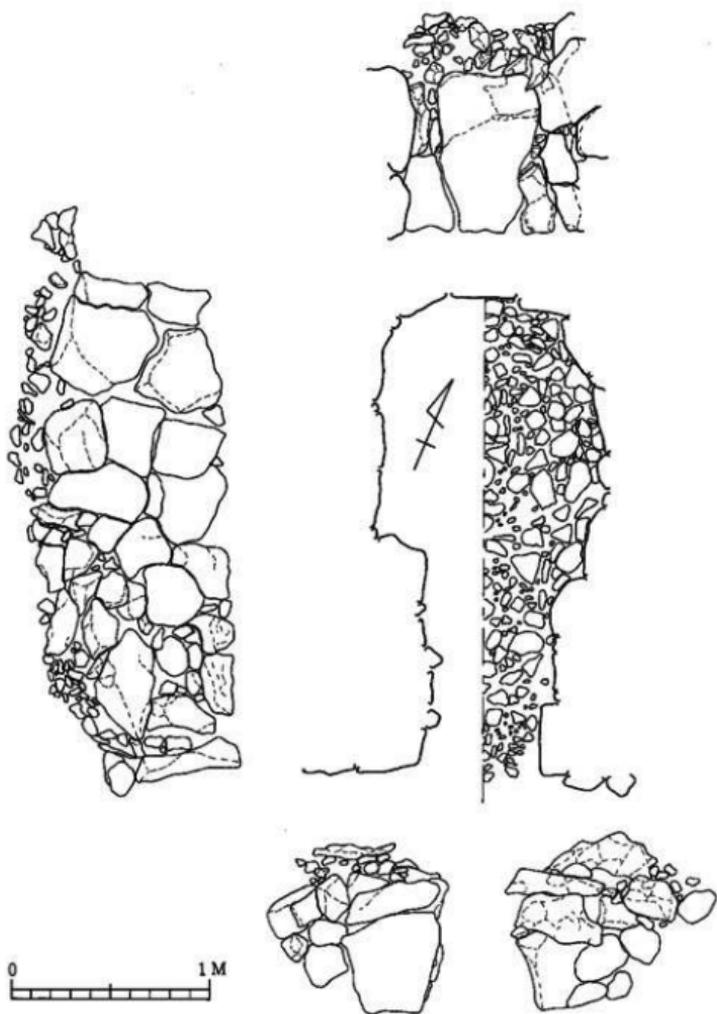
(4) 上縄引9号墳

3号墳の西に近接してつくられた規模の小さな円墳（表2参照）。当初は墳丘の高まりもなく、古墳の存在は予想できなかったが、表土を削った脱陸で、天井及び壁石の一部が出て古墳として確認された。墳丘のほとんどは地山を削って整形しており、盛土は天井石をおおう程度であったろう。

「掘り方」及び主体部 主体部は割れ石及び転石を使用した両袖型の横穴式石室である。石室の天井石は既に崩落していたがその他の部分はほぼ原形をとどめていた。これは、隣接する3号墳と同様に深い「掘り方」を掘って、その中に石室を構築した工法の結果である。「掘り方」は東西幅約2m、南北長約3mの範囲を約1.10m～0.9mほどの深さに掘り回めている。9号墳の「掘り方」と比較すると東西幅が広く、石室を構築するに要する最小限の規模と考えられる。石室の高さは玄室奥で1.00m、石室入口部で0.75mであり、石室全体がすっぽりと「掘り方」の中に納まる。「掘り方」の上には天井石が出ていた程度であったと考えられる。壁石の後に「掘り方」法面までの隙間には小礫を投げ込んで裏込めをしている。石室の平面は、玄室に典型的な駒張りが見られる。特に奥壁には幅の狭い（下幅35cm）縦長の石を据え、その両側に添えた壁石からすでに弧を描きはじめている。玄室の長さは左右に差があり、右壁のほうが長い。玄室入口部には特に玄門や欄石の設置はない。石室床には羨道から玄室にかけて一面に小礫を敷きつめていた。石室規模の計測は、前述のとおり奥壁両側の石がすでに弧を描くように据えられているため、計測点をどこでおさえるかが問題であるが、一応奥壁両側の石までを奥幅に加えて計測すると、玄室奥幅0.82m、同前幅1.05m、玄室長右（東）壁1.32m、同佐壁1.12m、羨道長右壁1.00m、同佐壁1.14m、同前幅0.61m、石室全長2.42mである。

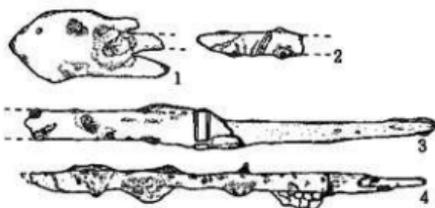
石室前には「掘り方」の深さに合わせて地山を变形形状に掘り回めた前庭があり、石室への出入の便を図るとともに、墓前祭の機能を果たしたものと考えられる。前庭のおよその規模は、奥幅（東西）約3m、南北長約3.5mであり、前面（南）は円弧を描き、ゆるやかな傾斜で下り込んでいる。前庭床面は石室床面とはほぼ同レベルで平坦であるところが3号墳のそれと異なる。前庭の奥、東西両側の法面のいずれにも石組はなく、素掘りのままである。

墓石はなく、石室入口部の左右前面に「掘り方」の範囲内のみわずかに石組みがなされているにすぎない。また、埴輪の配列もない。石室内はすでに盗掘され遺物は残ってはず、前庭からも遺物の出土はなかった。



挿図10 上綱引9号墳石室実測図

墳丘の大半を地山を削って造り出し整形していること、石室のほとんどが「掘り方」に納まり、かなり小形化し、玄室に胴張りがあること等から、構築は7世紀後半それも末に近い頃であろう。



押図11 石室内出土遺物実測図 (S=1/2)

埴輪棺出土遺物 (押図12, 図版6)

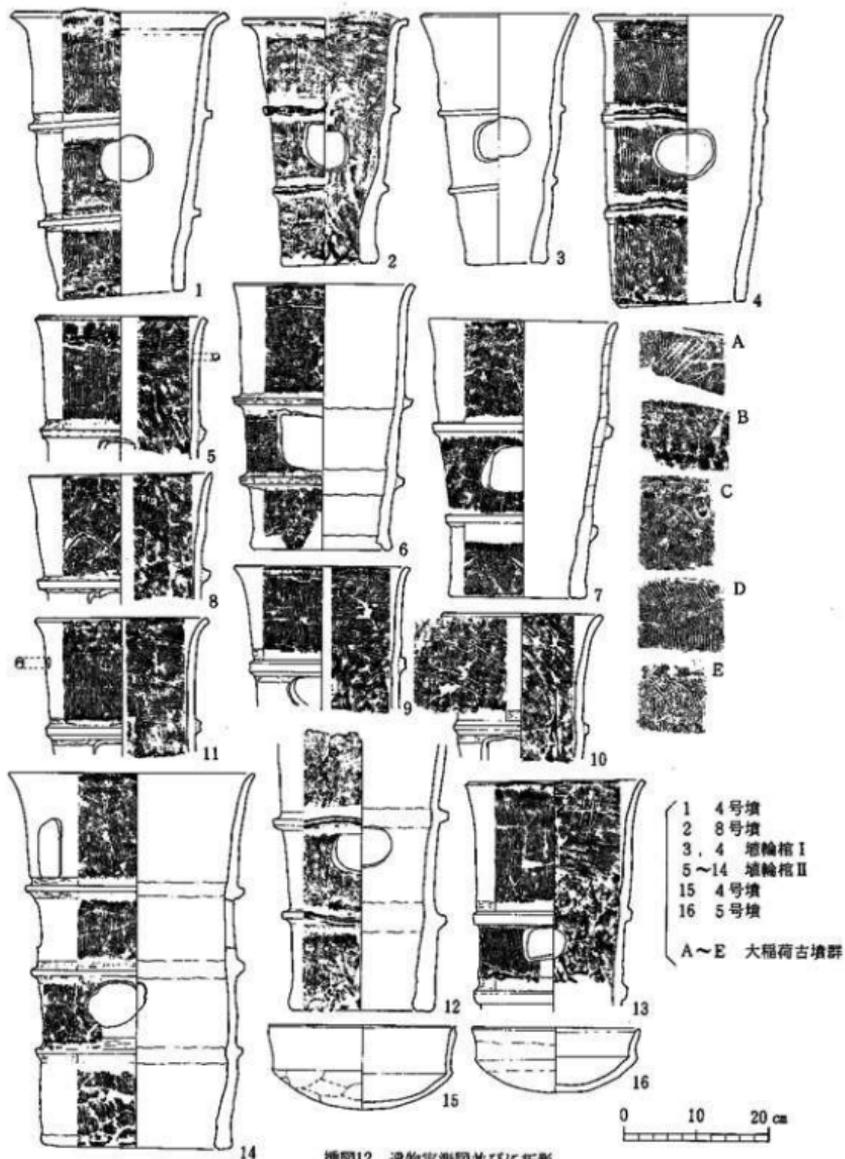
埴輪棺は、円筒埴輪を棺として使用した墳墓であり、土壌へ数個の円筒埴輪を横たえ埋葬したと考えられる。本遺跡に於いて、埴輪は復元完形及び個体として1号棺5個、2号棺10個出土している。それらの諸特徴として個々の技法・形態を挙げる。

号	形状	内容	技法	透し孔	直径	高さ	備考
1	ナテナダ	ナテナダ	内面	2段目	φ 4.5cm	2	No.1, 4は透し孔が開口した上段のみで底が丸みのある(口縁部も丸み)
2	ナテナダ	ナテナダ	内面	2段目	φ	2	透し孔は口縁部を削り取ったため1本しか透し孔がない
3	ナテナダ	ナテナダ	内面	上段の透し孔	φ	2	下の透し孔がナテナダで消してある
4	ナテナダ	ナテナダ	内面	2段目	φ 1.3cm	2	
5	ナテナダ	ナテナダ	内面	1段目	φ 1.5cm	2	安定した形
6	ナテナダ	ナテナダ	内面	1段目	φ 1.5cm	2	安定した形
7	ナテナダ	ナテナダ	内面	1段目	φ 1.5cm	2	安定した形
8	ナテナダ	ナテナダ	内面	1段目	φ 1.5cm	2	安定した形
9	ナテナダ	ナテナダ	内面	1段目	φ 1.5cm	2	安定した形
10	ナテナダ	ナテナダ	内面	1段目	φ 1.5cm	2	安定した形

棺1-No.1~No.4は、床から上部へ徐々に広がる形態を持ち、成形技法が同一で外面一次調整はタテナダ。内面はナダ技法で指とヘラとで丁寧なつくりとなっている。内面上部口唇部へかかるところに共通する7, 8cmの長さの///印があり、(且し、No.2は線刻が1本しかないが他の共通性から考え2本以上あったと考えてもよからう。)口縁部・底部・透し形態の共通性からもみて同一工人の作成によると思われる。No.5は、安定した形態であり器高約41cmで棺1では最大である。そして唯一のハケ技法を持つものである。

棺2は、いずれも外面一次調整はタテナダであり、内面は主に一段目までに工具を使用している。No.2は、二次調整としてここでは稀有なヨコハケを行っている。No.3は、タテナダを擦り消し交互のナメハケを行い、最下段のみ一次調整のままである。No.10は、器高52cm、ここでは最大であり、裾より直角に近く立ち上がり、透し孔もバラエティに富んだ形態を呈している。透し孔の形態、個数は別表の通りである。且し、No.1と棺1-No.5は、二段目の透し以外に径1cm程度の小孔を持つ。焼成法の違いとして、登り窯を使用したと考えられるものは棺2-No.1, 5, 7, 8, 9である。いずれも赤褐色を呈し良質で硬く締まっている。

これらのうち器胴上部(最上段)のみを持つ個体は埋葬時何らかの意図を持った上で使用されたと考えられる。



神岡12 遺物実測図並びに拓影

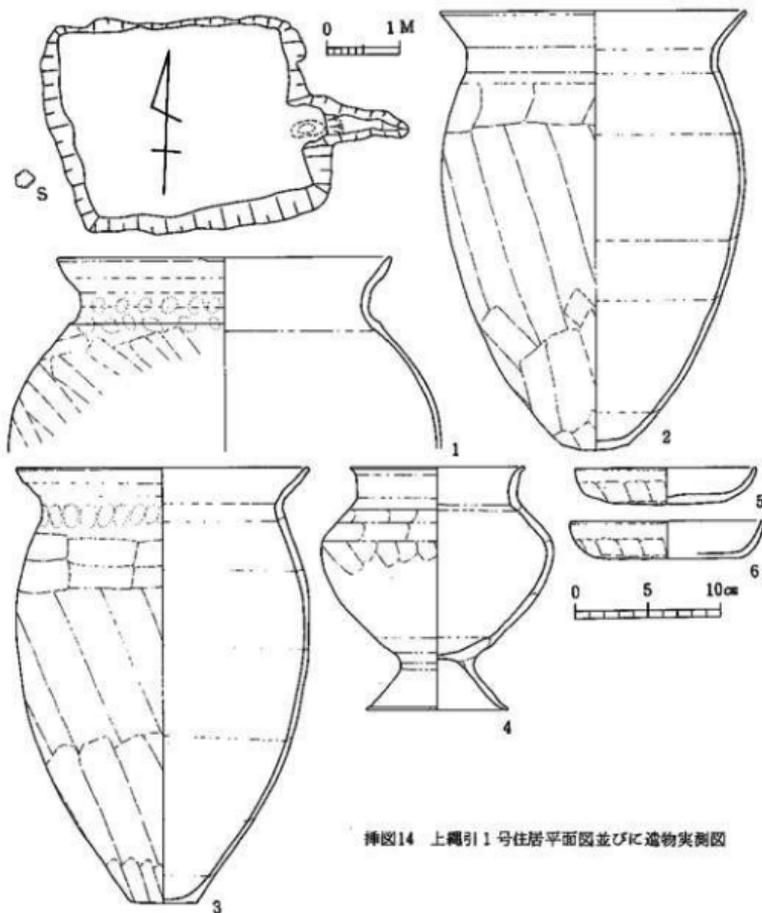
4. 土師器・須恵器を伴う遺構 — 竪穴住居跡 —

字北山地区においては、土師器使用の竪穴住居跡12軒を確認したが、発掘調査区の関係や地形的制約等により、完掘できたのは3号住居跡(H-3)のみである。各住居毎の重複はあまり見られず、わずかに2号→3号が知れるのみである。各住居跡毎の概要は以下の通りである。

表3 竪穴住居一覧表

	プラン	規模 (cm)	壁走向	備考	時間
1号	—	200以上	N 98° E (北)	地下式墳との重複の為、北側壁の一部しか確認できなかった。柱穴あり。	鬼高Ⅱ
2号	方形	(420+2) × 500以下	N 42° W (西)	3号住居跡に先行する。周溝が廻る。	鬼高Ⅱ
3号	長方形	290 × 430	N 4° W (西)	かまどは東側壁の南寄りに敷設される。周溝が廻る。	国分Ⅰ
4号	—	350以上	N 114° E (北)	北側壁に土師器の要素を使用したかまどが造り付けられる。	鬼石Ⅰ
5号	—	3m以上	N 64° E (北)	北側壁に円筒埴輪を使用したかまどが造り付けられる。	鬼高Ⅱか
6号	—	550 × (450+2)	N 48° E (西)	柱穴4個を持つ。周溝が廻る。西側壁にかまどが造り付けられる。	鬼高Ⅱ
7号	—	—	—	焼は確認できなかったが、床面と思われる壁面を確認した。他の遺構と重複している為に規模等不詳。	
8号	方形か	(100+2) × (400+2)	N 9° E (西)	西側壁にかまどを敷設。周溝が廻る。	
9号	長方形か	330 × (360+2)	N 14° W (西)	かまどは東壁側に位置するものと思われる。	真間(新)
10号	—	180以上	N 128° E (北)	北側壁にかまどが敷設されている。焼失家屋。南北は300cm以上(床面で確認。)	鬼高Ⅱ
11号	—	300 × ?	N 28° E (西)	かまどは東側壁に敷設されていたものと思われる。	
12号	方形か	400 × (250+2)	N 80° E (北)	かまどは東側壁に敷設されていたものと思われる。床面は現地表下約130cmにある。	国分Ⅰ

ここで、5号・12号住居跡のある地点と4号住居跡のある地点との間約150mの範囲は、B層石降下後において水の影響を受けて現在の地形に近くなったものであり、以前は小規模な谷地形であったことが地層の面から確認されている。また、H-5の南側からは遺構は確認できなかったが土器が密着した形で検出された。H.P-1は120 × (110 + 2) cm、深さ50cm前後の両丸方形であり、遺物はみられなかった。



押図14 上縄引1号住居平面図並びに遺物実測図

・上縄引1号住居跡（押図14，図版4-11～16）

住居の規模は東西3.5 m，南北2.8 mの長方形プラン（主軸方位はN88°E）壁高は約90 cmで比較的高い。かまどの両側はやや張り出した感じになっている。かまどは東側壁のほぼ中央にあり，長く，焚口から煙道端までが1.6 mある。遺物はほとんどがかまどの内部あるいは焚口付近から出土した。住居内における他の施設は認められなかったが，かまどと正反対の位置から平らな割れ石が検出された。住居内に柱穴がないので，あるいは柱の土台石となるものかも知れない。脚台付甕や坏などの形態からみて，9世紀の後半台の住居と思われる。舌状台地の西端部に一軒だけ検出されたものであり，（西側は古い地層があり岩山のようにになっている。）上縄引地内の土地利用の変化を捉える上での好資料である。

5. その他の遺構

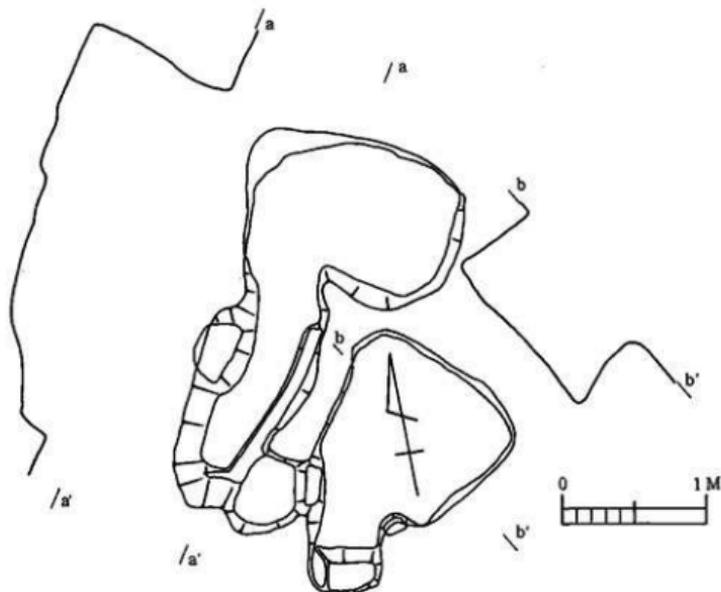
(1) 掘立柱建物跡 (K-1, 2, 3)

字北山地区において、3棟の掘立柱建物跡を検出した。いずれも調査区の制約から完掘はできなかったが、兩への緩斜面に造られており、梁間の走向もほぼ似通っている点は注目される。K-1の柱穴は円形の掘り形を持ち、径60~70cm、深さ80cm前後で、棟方向をN3°Wにとる3間×2間の建物であると考えられる。柱痕の確認ができなかったために柱間の計測は概略、北妻側510cm、棟側690cm、南妻側600cmである。K-2については、4個の柱穴を検出した。柱穴は円形の掘り形を持ち、径60~70cm、深さ40cm前後で、棟方向をN6°Wにとる建物であると考えられる。各柱間の計測値は、北妻側210cm(1間)、棟側480cm(2間)である。K-3についても4個の柱穴を検出したに留まったが、柱穴は円形の掘り形を持ち、径約70cm、深さ90cm前後である。棟方向はN19°Wになると思われ、各柱間の計測値は、北妻側210cm(1間)、棟側390cm(2間)である。

各建物の柱穴覆土中には若干の土陶器小破片が混じっていたが、いずれも時期比定の資料とは成り得ない。しかし、K-3が11号柱居跡と重複しており、それに続くものであることだけは明確である。

(2) 地下式土壇 (f-1.2)

挿図15 1・2号墳実測図



本遺構は東西に接して2基検出された。大小の差はあるがともに方形プランを呈し、似通った構造を持ち、ローム層の地山を削り貫いて造った単室構造の土壇である。両者ともに南側に入口部を付設するが、f-1では短くほぼ垂直に落ち込んでいる。また、入口部と主室の境には20cm前後の段差があり、入口部床面の両側両隅は6~7cmの窪みが認められた。f-2の入口部はf-1に比べると長く、主室に至るまでの間はなだらかなスロープになっている。床面は2基とも固くしまっており、f-1においては床と側壁の1部が火の影響を受けて赤く焼けており、床の上には5cm程の厚さで炭化物を多く含む黒色土層が堆積していた。天井部は崩落していたが、ほぼ垂直に立上る側壁が上部に行くと同傾するので、舟底型あるいはドーム状を呈していたものと考えられる。また、入口部の左壁には2基ともに竈状の削り貫きが認められたが性格は不明である。

明確な伴出遺物がないために構築の時期は不明であるが、覆土中には緑泥片岩の板碑片と見られるものがあつた。あるいは、中世に鎌倉周辺で営まれた「やぐら」と共通する遺構とも考えられるが、積極的な資料は無い。

(3) 墓 墳

字北山地区において、15基の墓墳と7基の土壇を検出した。(内2基は地下式土壇で、その概要は前述のとおりである。「墓墳」と「土壇」の区別は、埋藏骨の遺存するものを「墓墳」とし、形態的には墓と考えられるが骨が残っていないものは「土壇」とした。)火葬と直葬の両埋葬形態が確認されたが、発掘調査区域が限定されていたために、墓域の規模や両者の性格、変遷等を考察するには後続調査を待たなくてはならない。なお、各墓墳の概要は以下のとおりである。

表4 墓墳一覧表

項目 No	埋葬形態	形 状	規 模 (内は深さcm)	備 考
1号墓	直葬	隅丸方形	130×70 (20)	
2号墓	直葬	"	100×50 (40)	
3号墓	直葬	"	110×70 (40)	押図16-1~3, 大きな石が入っていた。
4号墓	火葬	"	160×74 (50)	
5号墓	火葬	"	104×48 (40)	
6号墓	火葬	円形		押図16-4~8, 図版4-17
7号墓	火葬	隅丸方形	150×84 (40)	
8号墓	直葬	"	110×78 (70)	押図16-21・22, 大きな石が入っていた。
9号墓	火葬	円形	径 100 (30)	小石が入っていた。
10号墓	火葬	隅丸方形	130×80 (25)	木炭片が一緒に出土。
11号墓	直葬	"	130×90 (30)	小石が入っていた。
12号墓	火葬	"	120×72 (40)	押図16-9~15
13号墓	直葬	"	134×90 (60)	押図16-16~19
14号墓	直葬	"	170×100 (40)	
15号墓	直葬	"	120×70 (40)	

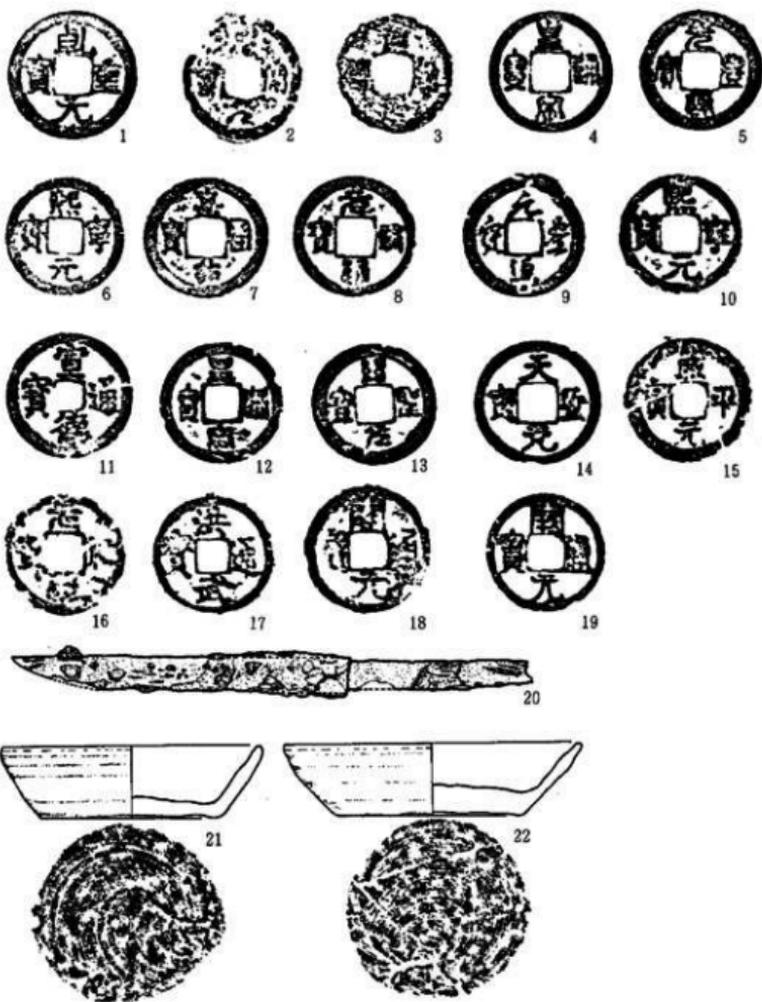


插图16 嘉靖内出土遗物

この他に、4号墳(径40cm、深さ60cm)からは木炭片に混じて骨片らしきものが出土している。また、6号墳からは安山岩製の火輪(図版4-18)と刀子(挿図16-20)が出土した。なお、出土した古銭で最も新しいものは12号墓出土の「宣徳通宝」(挿図16-11)で、初鑄年が1423~33年であるので、造幣年代も15世紀後半あたりと考えられる。しかしながら、埋葬形態の違いとその性格等を研究するには至らない。また、6号墳の南からは「開元通宝」(挿図16-19)が出土しているので、この付近まで墓域の内だった事は充分考えられる。

III 結 語

今回の北山・上縄引遺跡の調査により、両者とも縄文時代から近世に及ぶ複合遺跡であることが明らかになった。両遺跡とも赤城山南麓の舌状台地上に位置しており、神沢川と桂川により浸蝕された小さな縦谷によって限られている。縄文期の様相は十分に解明するに至らなかったが、この台地縁辺部に広く分布するであろう遺構の一部を確認し、竪穴住居跡4軒分を発掘調査し得たことの意義は大きい。また、散布資料ではあったが、貝殻文土器や燃糸文土器の検出は、マクロな立場から南関東や東北地方との関わりをも考察してゆく必要性のあることを示唆している。

弥生時代の生活の場は、五料山遺跡、荒砥五反田遺跡等の発掘調査やマッピング調査を行った結果、桂川の縁辺寄りに求められる。上縄引遺跡と県道深津・伊勢崎線を隔てた五料沼の北側地区では、やや様相が異なる。即ち、後者は、赤井戸系土器や石田川式土器の破片が比較的濃密に散布しており、生活の場であったことを想起させるものであり、前者は今回の調査結果に見る通り「墓域」であった。この上は、一日も早い生産遺跡の発見・調査が待たれる。また、周溝墓群自体の発見も、上川久保・飯土井の資料と合わせて非常に貴重なものであった。

古墳に関しては、今回調査した地域の東南500mほどのところに、前・中・後二子の三前方後円墳がある。両者ともに同じ台地上にあり、上縄引遺跡は台地の東〜東南斜面に、三つの前方後円墳は、台地南端近くに構築した前二子古墳を南端とし、中・後二子古墳が南北に並列してある。

今回の調査区域に限ってみると、6世紀前半から7世紀末にかけての9基の古墳と2基の埴輪棺が確認されている。これら古墳の他に、台地の頂上部から傾斜面にかけて、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての円形周溝墓群がある。これら周溝墓群と古墳は、互いに近接はしているが、周溝及び周堀の切り合いはほとんどなく、切り合いそうなところは一方(後築のもの)の堀を变形させている(5号周溝墓と6号周溝墓、6号墳と1号墳等)。また、この時期に相等する住居跡は一戸もない。これらの事実から、この区域は弥生時代後期から古墳時代にかけての墓域であったことは明らかであり、その範囲は、三つの前方後円墳のある台地南端にまで及んでいたものと考えられる。これらの分布をみると、台地頂上部に周溝墓が位置しているのに対し、古墳は傾斜面につくられているところが注目される。古墳のうち竪穴式主体部をもつ7号墳、埴輪棺及び、主体部は明らかでないが、埴輪の配列が明らかな4号墳、8号墳等構築時期の早いものは調査区域内両側の東南傾斜面に、3号墳、9号墳のような新しいものは北東側の南斜面にあり、南から北東へと順次構築された傾向がみられる。なお、この区域では、確認された古墳のすべてが小円墳であり、南にある大前方後円墳3基の分布と対称的である。同一墓域内における古墳分布を考える上での好資料の一つで

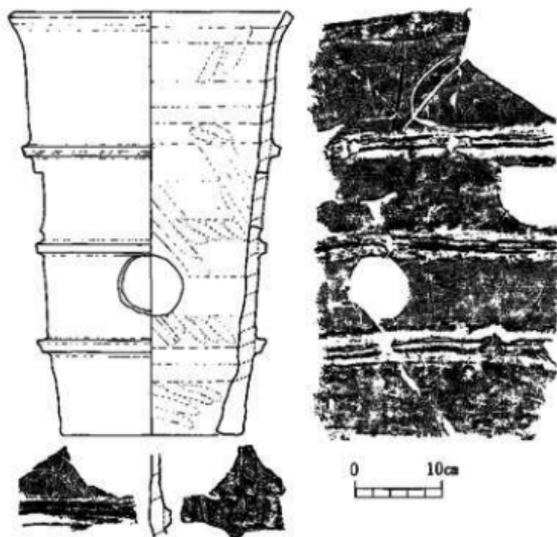
あろう。

埴輪自体についても、7号墳の周堀に造られていた埴輪棺に使用されていた素文のもの（ケズリ調整）や、4号墳に樹立されていた口縁部に動物の装飾が為されたもの（図版4-10）の発見等は、他の埴輪に施されたヘラ記号の集成や、前二子古墳発見の四神付飾土器（須恵器器台）と合わせて、土器製作工人の問題を考える上での好資料となるものと思われる。さらに、他地域の例からして、埴輪棺自体について、「第二埋葬施設」としての可能性もあるので、今後の慎重な考察が是非とも必要である。

北山遺跡における鬼高期～国分期の竪穴住居跡の発見は、前記の三前方後円墳をめぐる古墳分布と集落との関わりばかりでなく、神沢川を隔てた当該区内における古墳との関係を充分考えなければならぬ。その上で、これらの古墳築造と軌を一にして急激に住居跡の規模・範囲等が拡大していくという井上唯雄氏の指摘から、太田周辺の上毛野氏の勢力が荒砥地区に移ったとみる故尾崎喜左雄氏の論等の検証資料として、当地域の歴史資料にしてゆかなければならぬ。

中・近世の墓塚の発見は、前述の通り今後の発掘により、その範囲等の確認を待ち、周辺に分布する石造物等と合わせて、大室城跡との関連を検討することが是非とも必要である。

最後に、本調査を実施するに当りお世話いただいた農政部土地改良課、地元自治会岡田正治会長、遺物について御教示下さった石塚久則・中東耕志（県埋文事業団）・田口一郎（高崎市教委調査員）の各氏、調査を直接おし進めて下さった地元作業員の方々に謝意を表する。



挿図13 （参考資料）今井神社古墳の埴輪

(付記) 西大室地区の石造文化財

①大室地区石造文化財の背景

古代末期から中世にかけて、赤城南麓は藤原秀郷流一族の所領地であり、大胡氏を中心に山上氏、大室氏などが支配していた。西大室地方は、大室荘と呼ばれ、大胡領と洧名荘などに挟まれ、神沢川流域に古代末期から荘園が拡大してきた地域で、文永3年(1266)には、鎌倉幕府は常陸の在庁官人の常陸大掾の一族税所新左衛門尉平広幹に「上野国大室荘東神沢後内、田式町参段、在家式字」の領掌を下知し、宝治2年(1248)には広幹の亡母丹治氏(児玉郡丹党、安保氏の一族)への讞状を出している。

これらのことから、この地方には大胡氏が早くに法然に帰依し、念仏信仰に入ったこと、金沢文庫本『念仏往生伝』に安保領の被伝者の記載されていること等からみて、上野国でも早くから念仏信仰の入っていた地域であったことが窺える。現在この地方の中世石造文化財には、このような念仏信仰に基づく板碑などの遺物が多いことはそれを物語る。以下2・3の特色あるものについて記しておく。

②主なる石造文化財

『前橋市史』第1巻の板碑一覽表によると、市内在銘板碑43基中、西大室所在のものが9基ある。いずれも弥陀三尊または弥陀の種子で、大室神社には正和3年(1314)銘が3基もある。東大室、下大屋、泉沢、荒子など隣接地域を含めると、在銘板碑は15基で、市内の3分の1の板碑が所在する。そのうち鎌倉時代のものが10基ある。板碑の多い地方には石仏の造立が少ないのが一般的であるように、この地方には鎌倉期の石仏は現在までのところ1基も発見されていない。念仏の信仰が当時の大室地方の在地武士の間に広まって、板碑を造立することが流行したとみてよからう。武蔵地方に多くの鎌倉期の板碑が存在しながら、鎌倉時代の石仏がほとんど見受けられないと同様な傾向を示している。

南北朝時代から大室周辺にも石仏が造立され、泉沢・富田などに散見する。西大室町では観昌寺に中世石仏が3基、南北朝初期と推定する宝塔が一基ある。この頃から五輪塔、宝塔などが見受けられるのは、関東天台の活動による天台法華の思想が漸くこの地方庶民層にも浸透してきたことを示すものである。

つぎに、最も特色ある石造文化財としては、中世石殿である。荒子町薬師堂境内に「文明十一年」1479年銘、西大室町499木村元次氏屋敷内に「文明十六年」1484年のものがあるが、それらに混じって塔形式をもつ石殿がある。この分布は大室地方から赤堀村付近までみられ、室町時代から近世初期に及んでいる。さらに石殿の上に相輪及び宝珠を備えたもので寄棟造りの石殿がある。大室地内の在銘最古のものは「永正」(1504年～1520年)と判読でき、東大室集落西北の墓地にある。多くの地方では石殿は近世初期以後であるが、この地方には中世石殿が多い。かつての大室荘を中心とした室町時代在地領主の支配圏との関わりを持つものか、それとも念仏信仰の庶民浸透の中で生まれた特殊の信仰に基づくものかは今後の研究の課題である。

图版 1



北山·绳文1号住居跡



北山·H-9号住居跡



北山·H-4号住居跡



北山·H-5号住居跡



北山·K-1 (掘立柱建物跡1)



北山·F-2 (2号墓坑)



北山·F-6 (6号墓坑)



北山·f-6 (6号墳)



9号周溝墓



2号周溝墓遺物出土状態



周溝墓群（北西より）



遺跡地より赤城山をのぞむ



上縄引3号墳（発掘前残存状態）



上縄引3号墳石室（奥から望む）



上縄引7号墳石室



同左（天井石を除いた様子）



上繩引 9号墳主体部



上繩引 1号墳表道部



埴輪棺Ⅰ全景



埴輪棺Ⅱ全景



上繩引 1号住居



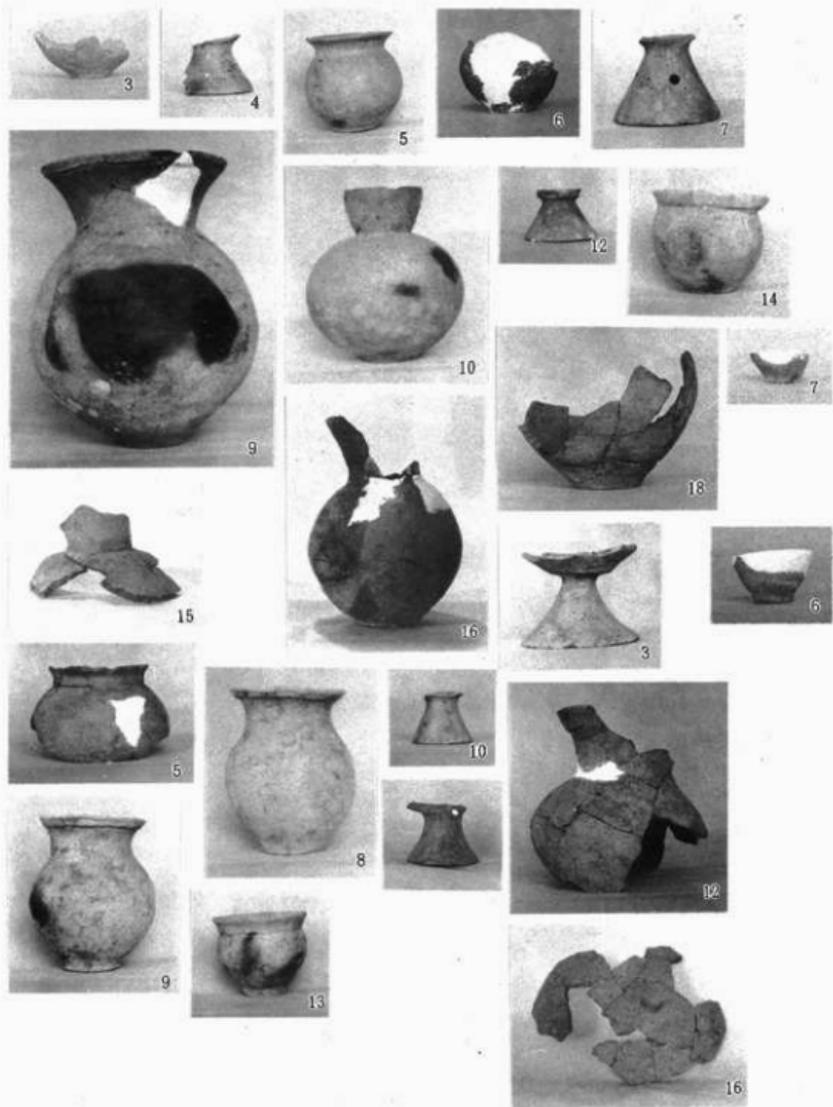
上繩引・近世墓

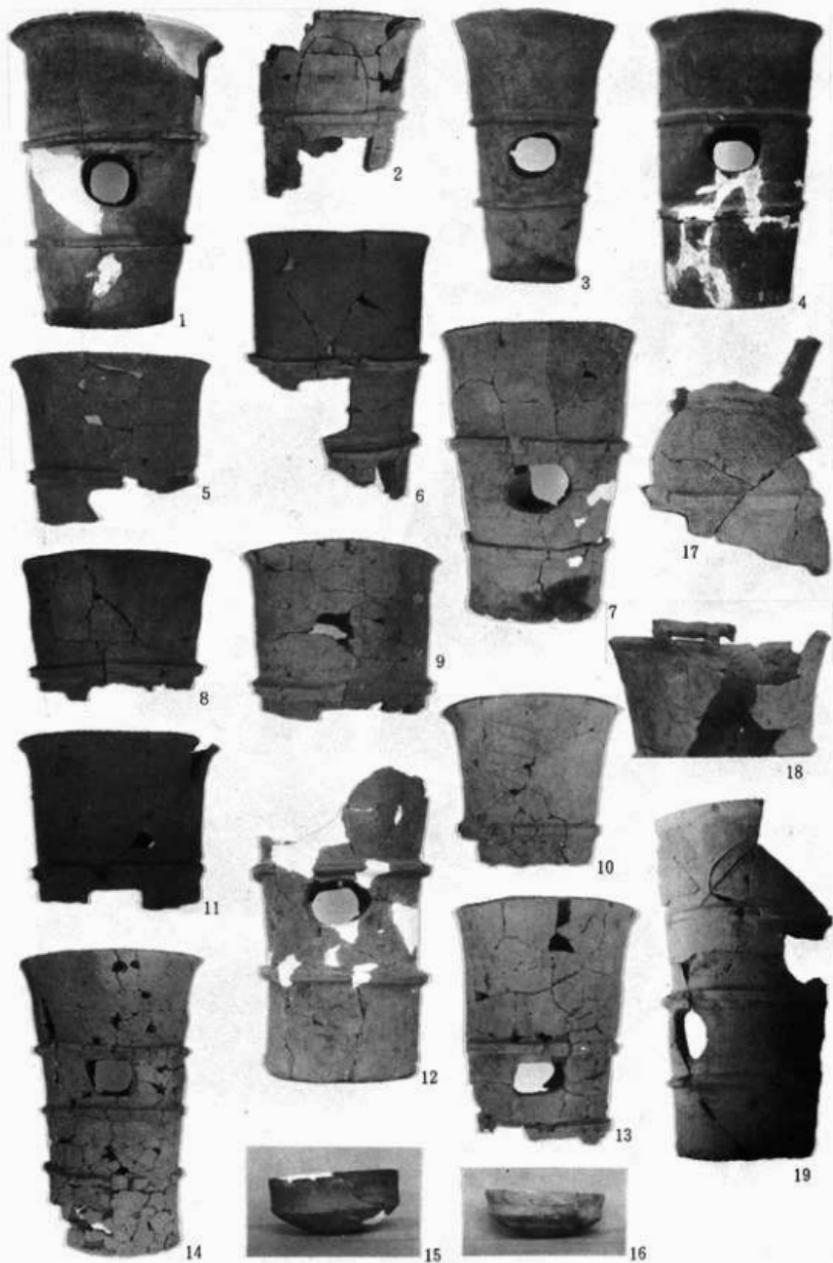


上繩引・溝跡

图版 4

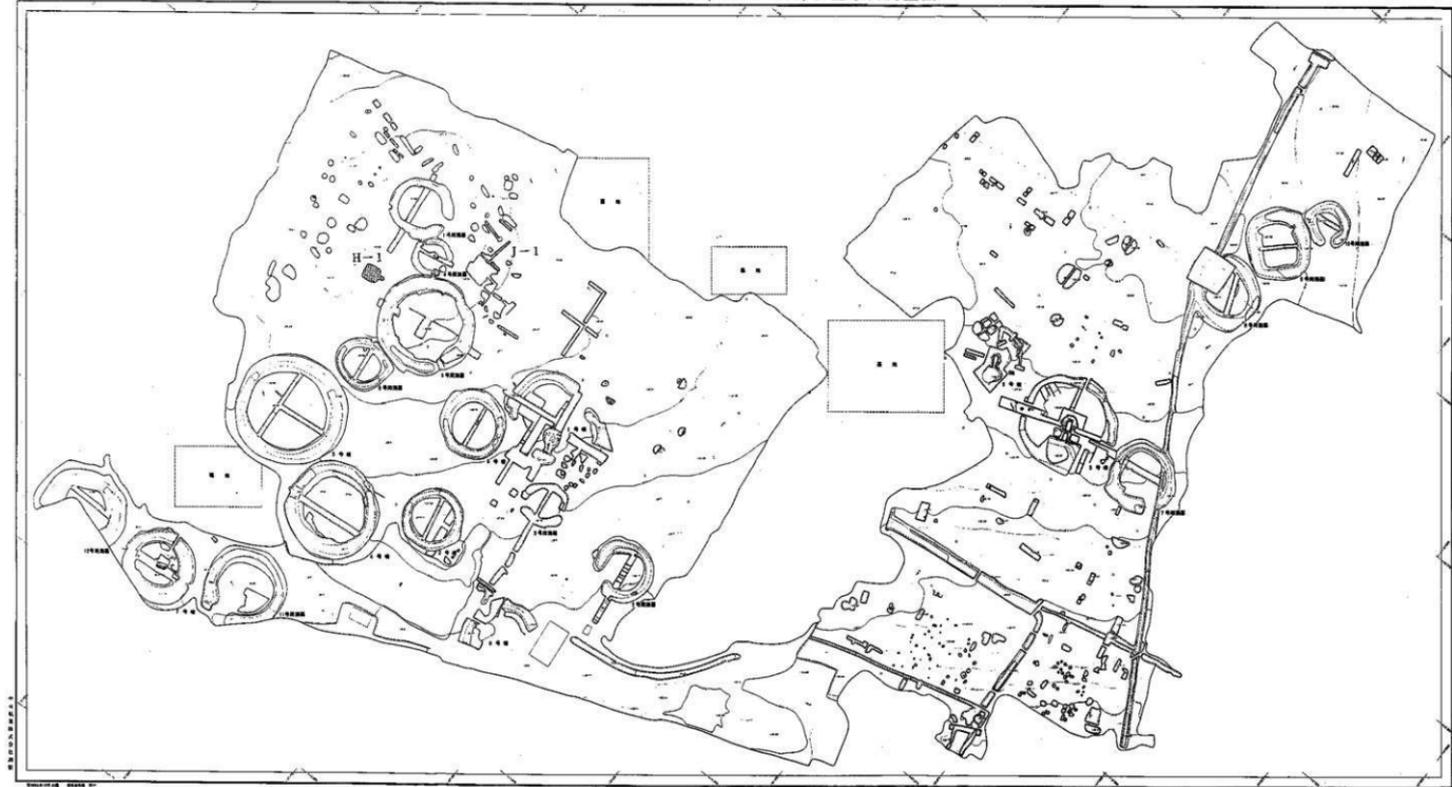






前橋市西大室遺跡群(上縄引遺跡)航空写真測量図

1:400



1:400



上縄引遺跡の発掘調査を行った人達
(昭和55年12月10日)

西大室遺跡群Ⅱ

印刷 昭和56年3月25日

発行 昭和56年3月31日

発行所 前橋市千代田町一丁目8-8

前橋市教育委員会事務局

社会教育課 (Tel 32-6538)

印刷所 前橋市大手町三丁目18-7

鎌倉文社印刷所

